

Japa Newsletter (毎月1日発行)



INDEX

1. コラム：新年に想う～日本がやめるべきこと・やるべきこと～
2. 寄稿：音楽ってなんだろう (広島市特任大使「ひろしま文化大使」沖田孝司)
3. 解説：街を探る：千住宿(3)歴史を今につなぐ再生へ—東京・足立区千住— (Japa 理事 小畠きいち)
4. 関連情報：時代環境・地方創生・COVID-19・社会的孤立孤独ひきこもり・社会システム
5. 読者の声：第二の人生 生涯現役で行く その9 (作詞・作曲家 高橋育郎)
6. 連携団体及び Japa からのご案内
7. つぶやき (編集後記に代えて)

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原 靖典)による。

※ 本 Newsletter は Japa 日本専門家活動協会が毎月 1 日発行の会員及び関係者向けの newsletter です。
1 ヶ月後に当協会の HP <https://japa-fellowlink.wixsite.com/japa/newsletter> に公開しています。

◇◆ Japa からのご案内 ◆◇

社会課題解決型のハイブリッド（人間 with AI）システムの企画・開発を検討中です。
レベニューシェアで共創いただける AI エンジニア（フリーエンジニア、副業等）の方
で、ご関心のある方は、Japa 事務局までご連絡ください。
巻末の「つぶやき」も参照ください。

1. コラム：新年に想う～日本がやめるべきこと・やるべきこと～

(Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典)

いよいよ 2026 年が明けた。いま、日本はかつてない拡がりと深さを持つ構造的な転換点に立っている。戦後復興・高度経済成長を経て、世界有数の経済大国となつたが、その成功体験を支えた「昭和モデル」は制度疲労を起こして久しい。これまでの延長線上にはない日本の未来に向けて、国民自らの意思による抜本的な社会システムのリデザインが不可避となっている。

[今すぐやめるべき昭和の遺産]

新しい社会システムを構築するためには、まず、感情論や機能不全に陥っている古い慣習や制度を速やかにやめなければ行けない。例えば、今話題の「外交カード」化している「パンダ」借受は、高額なレンタル料も併せ不要である。また、経済対策として繰り返される商品券やお米券のような現物給付の発想は、デジタル化された現代において非効率の極みであり、即刻やめるべきだ。さらに、直裁的にわからないカタカナ用語の乱用や、予定調和的な「PDCA サイクル」の固執、前に進めないための「課題探し」「特区」「実証実験」等はやめるべきである。

[今すぐはじめること：リデザインへの具体的処方箋]

古いシステムを停止させた上で、次世代に向けた具体的なアクションを「今すぐ」開始しなければならない。第一に、国家の基盤として、信頼性の高いデータに基づく政策立案（EBPM）を推進するための独立した「統計庁」の設立や、所有者不明土地や外国人土地所有問題等の基礎となる「令和の検地」（地籍調査）の促進が急務である。第二に、地方創生の基軸となる地域内でエネルギーと資金が循環する「地域循環型経済」を構築しつつ、越境 EC を通じて地方の価値を世界へ直接届ける仕組みづくりを急ぐべきである。第三に、ゾンビ組織の延命ではなく、新陳代謝を促す投資による「付加価値創造型産業」の励起に舵を切る必要がある。そして、これらの変革を支えるのは「人」である。高度デジタル人材を地方で育て活躍してもらう「地産地活」や、多様な働き方を支える個ベースの「ユニバーサル社会保障」の整備が不可欠である。

[目指すべき「つながる」持続可能社会]

我々が目指すべきは、デジタル技術と人間性が調和した「つながる」社会である。それは、孤立・孤独を防ぎ、多様な個性が尊重され、地域や国境を越えて価値が循環する社会である。AI やロボットが労働の一部を代替することで、人間はより創造的で本質的な活動、あるいは文化的な営みに時間を費やすことができるようになる。また、大量生産・大量消費の一方通行型経済から、資源を有効活用するサーキュラーエコノミー（循環経済）への転換も進む。都市と地方、高齢者と若者、日本と世界が対立するのではなく、互いに補完し合い、つながり、新たな価値を共創するシステムこそが、次世代に引き継ぐべき持続可能な社会の姿ではなかろうか。

[一人ひとりが変革の主体となる時]

社会システムのリデザインは、政府や一部のリーダーだけで成し遂げられるものではない。私たち一人ひとりが、既存の常識を疑い、自らの意識と行動を変容させることからすべては始まる。「消費者」という受動的な立場から、自ら社会に関わる「生活者・市民」へと意識を変え、地域社会や未来に关心を持つことが第一歩だ。一人ひとりの小さな「つながり」への意志と行動の総和が新しい日本の姿を形づくる。未来は予測するものではなく、自らの手で創り出そう。

補：本コラムの参考資料等は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column> に掲載

2. 寄稿：音楽ってなんだろう （広島市特任大使「ひろしま文化大使」沖田孝司）

2025 年の私の誕生日は 2 月 25 日！ 並びに並んだこの数字。

それは、何かを意味しているのでしょうか。はたまた、ただの偶然？！ しかしながら、それを味方につけるのか、ただ通り過ぎるのかは私次第ということでしょうか。いずれにせよ、私の明日は私が切り拓くということなのでしょう！

従来の音楽家の成り立ち、足跡とは違い、高校 3 年の 11 月に足を踏み入れた音楽の世界にて、大谷翔平選手には遠く及びませんが、演奏家（ヴィオラ奏者）とクリエーター（作詞・作曲）としての二刀流の私です。

1975 年、今を遡ること 51 年前、広島東洋カープが初めてセ・リーグを制したその年、私は「甲子園」の夢破れた高校 3 年生。春先、ギター片手に作った曲が、ヤマハ「ピピュラーソングコンテスト」広島県大会、中国大会へとコマを進め、奇跡的にも全国大会に出場することとなりました。高校球児の生活から解き放たれた 8 月、進路についての三者懇談の席上、音楽の道へ進みたいと突拍子もない決意表明から、すったもんだの末の 11 月、両親から「人生に後悔はつきものだけど、ひとつでもその後悔を減らそう。」と、1 年間の猶予後、音楽大学に入学できればその道に挑戦するべしという寛大ですが無謀ともいえる誓約が成立しました。周囲からはもちろん、反対意見しかありませんでしたが、苦肉の策として、入学志願者がほぼ「0」というヴィオラでの受験を選択し、爾来、なかなかどうして波乱万丈の人生を怒濤の如く送つてきました。

ヴィオラを初めて手にしてから 3 か月後、次年度の入試のため、そして、カルチャーショックを受けるため、「東京音楽大学」一校のみを受験。作戦通りヴィオラ科受験者は私ただ一人。しかも、どこでどう間違ったのか現役で入学というおまけつき。その後、とにかく死に物狂いの 4 年間を過ごし、恩師の勧めもあり、卒業した 1980 年夏、ドイツへと旅立ちました。

総合大学・専門大学が公立であり、その環境は抜群といえるドイツ。何とかデトモルト音楽大学に潜り込むことができ、2 年という時間制約のある中、諸事情により最高年限の 8 年間在籍。卒業試験後、40 倍の難関を突破し、1887 年設立のドルトムント市立フィルハーモニーオーケストラに入団。1993 年、ドイツ生まれの長男を日本の教育の中で育もうと、13 年間暮らしたドイツに別れを告げました。

帰国直前の 1993 年 6 月、同フィルにて、私が言い出しちゃとなり、広島原爆被爆者のためのチャリティーコンサート「Hiroshima' 93」を開催し、実況録音盤 CD を携えて日本へ帰国。

1994 年、広島市に居を構え、1995 年、「生の音楽を体験しよう！」を合言葉に、「マイ・ハート弦楽四重奏団ひろしま」を結成し、「マイ・ハート・コンサート」を開始。爾来 30 年の歴史を紡ぎ、現在に至っています。その後ろ盾となる「マイ・ハート・コンサート」推進委員会発起人の一人が、現顧問の岸田文雄衆議院議員（同じ年）です。

1996 年、私がプロデュースし、同フィルからの 8 名と、当時の（社）日本オーケストラ連盟加

盟の全 22 プロオーケストラからのピックアップメンバーを中心に編成した「ザ・ハーモニー」により、「Hirosima' 93」のアンサー・コンサート「We love the EARTH from HIROSHIMA」を広島と東京で開催。ドイツと日本でのコンサート収入、及び、CD 販売収入合計の 500 万円を広島市に寄付することができました。

その後、私は「ひろしま」の想いを綴った同名の楽曲「We love the EARTH from HIROSHIMA」を作詞・作曲し、広島エフエム放送の番組テーマソングとして抜擢されました。

そして、2023 年 5 月：G7 広島サミット「パートナーズプログラム」、2024 年 2 月：エディオンピース・スティング・広島（サッカースタジアム）柿落し、同 6 月：サッカーワールドカップアジア予選日本対シリア戦にて、歌心りえ（ヴォーカル）、沖田孝司（ヴィオラ）、沖田千春（ピアノ）の 3 名が演奏し、華を添えました。



2023年5月19日 G7 広島サミット
「パートナーズプログラム」
<https://youtu.be/uHD-b9b5Pw4>



2024年6月11日、サッカーワールドカップ
アジア予選：日本対シリア戦にて
<https://youtu.be/V8WvqvAahZQ>

2025 年、その独特な演奏体型「田」の字型による演奏が国内で高い評価を得、これまでに 9 枚の CD もリリースし、結成 30 周年を迎えた「マイ・ハート弦楽四重奏団ひろしま」は、3 月、1000 万円のクラウドファンディングを成立させ、その目的の一つであるヨーロッパ 3 力国（ドイツ・オーストリア・チェコ）5 都市（ハノーバー・ヒルデスハイム・ウィーン・プラハ・ナホト）にて 6 コンサートを開催し、その中の 4 コンサートでは、地元歌手と「We love the EARTH from HIROSHIMA」を共演・披露。ウィーンでは国連事務局にて、「TICAD9」（第 9 回アフリカ開発会議：本会議は 2025 年 8 月横浜市にて開催）キックオフイベントでも演奏。

「マイ・ハート弦楽四重奏団ひろしま」は現在、第 10 弹となる結成 30 周年記念 CD を制作中。現在進行形として、2 巡目となる広島県内全 23 市町総断コンサート、日本国内全 47 都道府県総断コンサートを再スタートさせています。

「後悔、後にも先にも立たず」！

「後悔」をひとつでも少なくとの思いで、私の人生を後押ししてくれた両親に感謝するとともに、「後悔」のないようこれからも精進したいヴィオラ奏者としての沖田孝司は、現在、以下の定期コンサートを、家内沖田千春（ピアノ）とともに、ボランティアにて開催しております。

*沖田孝司・沖田千春は法務省令和元年度「人権擁護功労賞」最高位「法務大臣表彰」をそれぞれが受賞。

*沖田孝司は、1996年、日本青年会議所より「TOYP 大賞」、2002年、広島市より第1回「広島市民賞」を受賞。2018年より広島市特任大使「ひろしま文化大使」を拝命。

★月一回コンサート「おもてなしマイ・ハート・コンサート」（通称「おもマイ」）

I、たかし&ちはるの「おもマイ」 in Open MUJI（無印良品広島アルパーク）

毎月第2金曜日 ①15:00～、②16:00～

II、おりづるタワー「マイ・ハート・コンサート」～We love the EARTH from HIROSHIMA～

毎月第3土曜日 or 日曜日 ①13:30～、②14:30～

III、「おもマイ」 in ひろぎん HD 本社ビル1F トウモロウスクエア

毎月第4金曜日 ①13:30～、②14:00～

IV、広島市立中央図書館コンサート

毎月第2金曜日 12:15～13:00 開催

V 「おもマイ」 in 明治安田ヴィレッジ広島

2026年2月4日（水）より、毎月第1水曜日開催予定 ①18:00～、②19:00～

★年2回コンサート

VI、「みんなの芸備線コンサート」備後庄原駅・三次駅・向原駅・志和口駅（JR）

2024年3月26日に開始された芸備線再構築会議後、「私たちの芸備線」という思いを共有し、「芸備線は故郷の宝」と再認識し、音楽とともに明日への希望を謳います。

VII、宮島：「春のさくらコンサート」、「秋のもみじコンサート」 in 表参道商店街・大聖院

★年1回プロジェクト

VIII、旧広島市立第一高等女学校（現広島市立舟入高等学校：1945年の原爆投下により最も犠牲者の多かった学校）慰靈演奏 8月6日9時～ 同慰靈碑前

IX、「We love the EARTH from HIROSHIMA」プロジェクト 8月6日10時～ 広島平和記念公園内国際会議場横

地球市民が「愛」を合唱するプロジェクト

X、「ヤン・レツル」Festival 8月15日 in おりづるタワー

「原爆ドーム」（旧広島県物産陳列館：1915年8月15日開館）を設計し、2025年、没後100周年を迎えたチェコ人「ヤン・レツル」の功績を讃えるとともに、その開館記念日8月15日、ひろしまの想い「We love the EARTH from HIROSHIMA」を発信する Festival

XI、「沖田孝司&千春 新春ロビーコンサート」1月3日14時～ in 奥田元宋・小由女美術館

沖田孝司の故郷三次市にある奥田元宋・小由女美術館での恒例コンサート

1993年、ドイツから帰国後、クリエーターとしての沖田孝司が世に送り出した楽曲

※ コロナ禍の 2021 年夏、これまで頂いた広島への「愛」に感謝するとともに、ひろしまからの「想い」と「エール」を届けようと、以下の中の 11 曲も含め、15 曲を収録した CD 「tomorrow from HIROSHIMA」 とメッセージパンフレット 10000 組を制作し、国内約 6200 の全高等学校・全特別支援学校をはじめ、関係各所に寄贈する 「tomorrow from HIROSHIMA」 プロジェクトを、「マイ・ハート・コンサート」推進委員会、広島市教育委員会、比治山大学共催で実施。

校歌

- 三次市立「みらさか学園」（小・中教育一貫校）
- 広島市立石内北小学校
- 広島市立広島みらい創生高等学校校歌「Yes we can!」

テーマソング

- ここはふるさと：一般社団法人広島市老人福祉施設連盟
- 安佐動物公園の歌：広島市安佐動物公園
- ひろくんのうた：広島銀行イメージキャラクター「ひろくん」
- Sailing for Everyone：日本ハンザクラス協会（障がい者ヨット）
- 「さあ はじめよう！」～It's my Pleasure!～：第 19 回「全国ボランティアフェスティバルひろしま」（2010 年）
- We love Sun♥Chu：山陽女子短期大学イメージキャラクター「Sun♥Chu」
- なないろ：社会福祉法人福祉の郷「なないろ作業所」

イメージソング

- あさきたのうた：広島市安佐北区 ※2014 年 8 月、広島市安佐北区・安佐南区を襲った集中豪雨による土砂災害後誕生。歌詞を変え、「ひろしまのうた」、「みなみあそのうた」（2016 年 4 月、熊本地震により多大な被害を受けた熊本県阿蘇郡南阿蘇村応援ソング）として活用中。
- 伝えよう笑顔と心：三次市「ひと・かがやき」フェスタ（人権）で誕生し、広島法務局をはじめ、全国人権擁護委員連合会、及び、同協議会で活用中。
- いつまでも：広島市立幼稚園愛唱歌

応援歌

- We love Baseball：野球関係者、教育関係者、広島県各市町、広島県高校野球連盟
- 君の名は：サッカー応援歌
- 私の鯉（恋）の物語：広島カープ女子応援歌
- わが故郷は：「小さな親切運動」本部、旧広島市立第一高等女学校への献呈作品

「音楽は愛です。」

人生には限りがあります。どれだけの時間があるのかは誰にもわかりませんが、「後悔、後にも先にも立たず」を胸に刻み邁進します。そこには、「愛」とともに、「音楽」があります。野球讃歌「We love Baseball」をスポーツジャーナリスト二宮清純氏とともに作りました。すでに、広島県教育委員会、広島市教育委員会、県内の各市町、広島県高等学校野球連盟、広島県高等学校吹奏楽連盟、そして、広島東洋カープが活用に向けて動き始めています。いつの日にか、甲子園で流れているかも？！ <https://youtu.be/MyGuCqBRoXY>

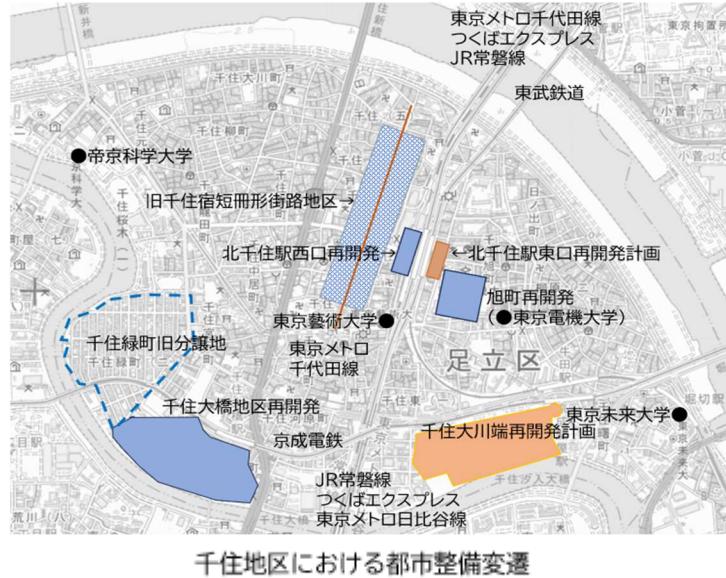
補：寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載

3. 解説：街を探る：千住宿（3）歴史を今につなぐ再生へ—東京・足立区千住— (Japa 理事 小畠きいち)

～千住宿開宿 400 周年：宿場・商人町からの歴史転回と再生へ～

(09) 旧と新の混合再生

千住地区は、徳川家康が江戸に入府して以来、江戸四宿の一つとして発展。日光・奥州道中の宿場町として栄え、その後、商業地や工業地帯、郊外の住宅地へと変遷してきた。また、東京北部の鉄道の結節点としての重要性は増した。都市空間としては、江戸時代以来、旧宿場街の短冊状に密集した商住区を中心に発展したが、住居エリアの開発整備は1930年代に京成電鉄が分譲した南部の千住緑町が最初とされ、その中に同潤会千住緑町住宅も分譲された。



千住地区における都市整備変遷

一方、宿場街から、商業地や工業地帯、郊外の住宅地へと拡張変遷したが、既存の短冊状の商住区は依然として密集した住宅を主とした風景が続いていた。

鉄道では、JR 常磐線、東武線、地下鉄日比谷線の既設路線に加えて、1969 年に地下鉄千代田線開通、2005 年につくばエクスプレス開通によって交通要點としての注目が高まった。この期間中に大きな再開発も行われ転換期を迎えた。1985 年には駅ビル「北千住ウイズ」(現ルミネ)が完成し、その後 2004 年には「北千住駅西口市街地再開発」も竣工した。これらの再開発により、千住の玄関口としての景観が大きく変わった。これまで、千住地区に不足していた大型商業施設と文化施設「シアター1010」などの開設がなされ、北千住駅西口周辺地区は大々的に面目を一新した。

さらに 2006 年には、東京藝大の一組織が小学校跡地に進出し、区と共同で千住アートリエゾンセンターを設立。このセンターは、新しい芸術の創造と地域との交流の拠点として目指して設置された。それ以降、東京未来大学、帝京科学大学、東京電機大学などの大学進出しが続き、下町の学生街として発展し、若者が街に溢れ、街における賑わいと活気が上昇。

また、南部の「千住大橋地区」では、都市再生機構 (UR 都市機構) と地元企業ニッピが共同で再開発を行い、工業用地を転用して、共同住宅棟、生活商業施設、医療・介護施設、業務関連施設などの都市機能を複合的に再開発するプロジェクトを実施。2011 年に住居棟の入居が開始され、隅田川沿いのスーパー堤防とともに、斬新なリバーサイド景観を作った。

現在、整備の遅れていた北千住駅東口地区で、駅接続の都市再生計画検討である。さらに、京成閑屋・東武牛田駅付近の隅田川河岸沿いに、「千住大川端再開発計画」が進行している。このように、再開発が次々と進む一方で、旧宿場街は依然として昔ながらの姿であった。

しかし、そこにも変化の兆しが見え始めている。古民家や旧家、古びた店舗などを対象にしたリノベーションが進行、外装は時代風やアーチェック風に、内装は古民家・アンティーク風と趣向をこらした改装が進められている。このようして、千住地区では、新旧の要素が混合した新しい動きが進行中で、ここに興味深い変化も起きている。若者を含む関係者や住民などの結びつきによる地域再生の協働体制の動きが起き始め、注目されている。

今後の課題として、細街路の多い短冊状の旧宿場地区における防災性と交通安全との向上などを目指した都市整備に関する課題解決に対して、困難な対応策が待ち受けている。

(10) イベントと祭りによる“つながり”

千住地区では、年間を通じてさまざまな伝統的な祭りや季節のイベントが行われている。1月と7月には「勝専寺」の闇魔開き・闇魔祭が開催され、元旦から7日までの間には、初詣を兼ねて毎年恒例の「千寿七福神」巡りが行われている。夏の「千住地口あんどん」祭り、また秋には、15 それぞれの神社で神輿や山車を担ぎ出し、住民や来街者が交流参集し恒例の祭礼を盛り上げている。



多くのイベントも開催され、「千住だじゅれ音楽祭」、「千住・人情 芸術祭」、「北千住・荒川ハーフマラソン」、「東京芸術センター定期演奏会」、「足立の花火」、「荒川河川敷で開催されるあだち区民まつり『A-Festa』」、「東京藝大のアートパス」など、季節を通じてさまざまな催しが行われ、多くの人々が街に集まり賑わいを見せている。このように、年間を通じての歴史ある恒例行事に加えて新イベントなど開催により多様な人々を街に引き寄せている。一層、街の賑わいを高めている。



(11) 古民家・旧家リノベーションで新感覚へ

北千住では、空き家や古民家を再生・再利用する取り組みが盛んに進められている。築100年以上の歴史ある古民家を、趣を残しつつ現代的な生活スタイルに合わせてリノベーションする事例も多く見られる。外観はアーチェック風に仕上げ、内装は古民家風のスタイルにしたカフェや、小規模ながら味わい深い旧家を、東京藝大や美大の学生たちや職人がDIYで改築し、アートスタジオやアトリエとして利用している例もある。または、これらをシェアオフィスとしても活用されている。裏通りの古びた飲食店などを、おしゃれで小綺麗な外装にリノベーションした例もあり、これら改装店が連なる横丁の路地としてイメージを一新し、若者から年配者、

嗜好者まで幅広い層から人気を集め、地区の新感覚なスポットとして再生・復活が進んでいる。

(12) リノベーションによる小規模なアートビジネスなどの拠点・起業へ

千住地区では、アートを通じた地域活性化プロジェクトが長年にわたり継続されている。千住一丁目創業支援館「かがやき」が 東京芸術センターの 11 階に開設され、文化産業や芸術分野での起業を目指す個人・団体を支援している。インキュベーションオフィス（共同利用スペース）の提供や、専門家による相談支援などを進めて、起業への支援も行っている。



多くの古民家・旧施設などをリノベーションにより活用している例として、文化拠点「仲町(なかちょう)の家」がある。これは歴史ある名家の旧宅を改装し、文化と交流の場として再生させたもので、現在は、東京藝術大学、足立区、NPO 法人の 3 者が主催するアートプロジェクト「アートアクセスあだち 音まち千住の縁(えん)」の拠点として運営されている。元銭湯・ボウリング場をリノベーションした“BUoY(ブイ)”は、ステージ・カフェ・ギャラリーなどを擁する演劇などのアートセンタ施設として再生されている。



築 90 年の古民家を再生した「路地裏寺子屋 rojicoya」は、日本茶カフェ、和文化体験を提供し、住民および来街者との交流を促進している。日本文化に触れる機会を創出し、東京観光財団、観光庁の事業に応じてインバウンド向けの和文化コンテンツなど制作などで、仲間の輪を広げて、東京都創業 NET にも登録されている。

1938 年（昭和 13 年）築の古民家「旧板垣邸」を改装した“和食 板垣”は、「街の風景を残したい」とオーナーの思いから、マンション建設の競合がある中でも建物を存続させると決断。千住地区に人々が集まる垢抜けしたコミュニティの場として作りたいという思いも込められた。現在は、食の職人の技を取り入れた日本料理店「和食 板垣」として営業している。また、この「旧板垣家住宅主屋」は国の登録有形文化財に答申され、登録された。

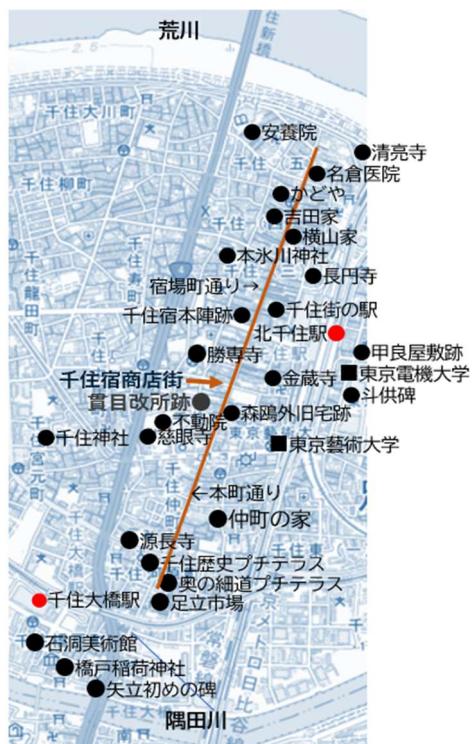
古民家をリノベーションした複合施設「せんつく」は、「千（せん）のつくる（つく）が行き交う場所」を目指したコミュニティ・スペースとして、地域のワークショップやイベント開催と飲食店経営などを通じて、地域住民の交流促進、新たなコミュニティ形成、地域活性化を目指すとして再生・開設された。東京藝術大学や美大関係の学生・若者などが関わり、空き家を DIY で改裝してアトリエやオープンスペースとしてリノベーション運動を進めるなど、「アート・ルネサンス千住」として街の新たな魅力の生み出しを進めている。

またクリエイティブスペースの提供を目的とした NPO「千住芸術村」は、学生有志と協力して、空き家を DIY でリノベーションし、アトリエやオープンスペースとして活用し、住民やオーナー、利用者が交流できる場を作り出す活動を推進している。これらのような取り組みは、街の

新たな魅力を高めるためにと住民とよそ者などの協働体制を構築し、街再生に大きく寄与している。この様に、空き家や古民家などの古い建物を有効利用しながら、地区のイメージを刷新して地域を蘇らせる動きとして地区に活動を広げている。

(12) 地元愛とよそ者：人が縁を結ぶ

千住宿以来の千住住民の地元愛が強い。その一例として、千住に関する出版物がある。千住の歴史、文化や生活に焦点を当てたものが多い。『千住宿歴史ウォークガイドブック』はNPO法人千住文化普及会が発行している。この会は、千住文化の伝承を次の子供たちに伝えふる



千住宿の散策スポットルート (芭蕉矢立の碑~荒川堤)

さとつくりを推進することを目的としている。同時に千住街歩き案内ガイドツアーも主宰、足立区が宿場町通り商店街に設置した観光案内所「千住街の駅」も運営も行っている。「千住街の駅」は、北千住の歴史や魅力を知るのに欠かせない施設となっている。

また地域の雑誌として、千住・町・元気・探険隊が発行した町雑誌「千住」がある。1996年から創刊し、20号まで出版した。

今は発刊停止だが、千住に興味を持つ人々に広く愛読されている。



これらの動きは住民による強い郷土愛から発せられている。千住住民は千住宿以来の他者を受け入れ、開放的で

寛容な気風が連綿と続くことで、現在も住民と関係他者と縁を結び街の賑わいを高めに、協力は今も持続している。千住は、大手町まで 15 分という至便と複数の路線が交差する交通結節点としての高い利便性、宿場町のなごり、旧江戸情緒、歴史文化の継承、気取らない旧宿場・下町気風を継承している。さらに東京北部の下町最大の学生街として、多様な年齢層・新旧織り交ぜた都市として変化し、独特な街・地区の再生を続けている。

【参考】

- 足立風土記（1）千住地区 足立区教育委員会 2005年
 - 「まち裏」文化めぐり 清水麻帆 採流社 2022年
 - 千住宿400年：足立区立郷土博物館 2025年
 - 朝日新聞 「千住宿」2025年7月1日 朝刊
 - 千住芸術村 <https://www.1010akiya-saisei.com/>

補：本解説の参考資料等は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column>

4. 関連情報：時代環境・地方創生・COVID-19・社会的孤立孤独・社会システム

[時代環境]

- ▼2025/12/28 マスクだけ「別の起業家ゲーム」をしている——スピードが武器、複数を同時実行、重心は Starlink | Forbes JAPAN <https://forbesjapan.com/articles/detail/88217>
- ▼2025/12/24 令和8年度の経済見通しと経済財政運営の基本的態度 閣議了解 https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/minutes/2025/2025_shiryo01-2.pdf
- ▼2025/12/13 米中に軽視される「戦略なき日本」 前駐中国大使・垂秀夫が痛烈批判 | クーリエ・ジャポン <https://courrier.jp/news/archives/425254/#>
- ▼2025/12/12 従来と大きく変わった米国の「国家安全保障戦略」と中国の反日キャンペーンを読み解く樋口 譲次 元・陸上自衛隊幹部学校長、陸将 JBpress <https://tinyurl.com/2demmqzg>

[地方創生・日本創生]

- ▼2025/12/28 都道府県別に見た「純粋空き家」の動向～戸数が多いのは三大都市圏、比率は西高東低～ 三井住友信託銀行 調査月報 2026年1月号 <https://tinyurl.com/2d4nfyoj>
- ▼2025/12/25 祝ノーベル経済学賞 独占！モキイア教授 「日本には大改革が必要」 AIが変える未来 | Forbes JAPAN <https://forbesjapan.com/articles/detail/87327>
- ▼2025/12/23 地方創生に関する総合戦略～これまでの地方創生の取組のフォローアップと推進戦略～ 閣議決定 https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/chiikimirai/pdf/20251223_honbun.pdf
- ▼2025/12/23 おこめ券ばかりか信じがたい法改正が進行中…コメが史上最高値でも「減反強化」に走る鈴木農相の呆れた言い分 | PRESIDENT Online <https://tinyurl.com/2498889l>
- ▼2025/12/16 所有者不明土地問題と政策動向 一新たな土地制度の普及へー 財務総合研究所 ランチミーティング <https://www.mof.go.jp/pri/research/seminar/fy2025/lm20251216.pdf>

[COVID-19]

- ▼2025/12/03 恐ろしさのピークは20年4月 コロナ禍の心理データ公開 阪大など【新型コロナウイルス】：朝日新聞 <https://www.asahi.com/articles/ASTD31TQ9TD3UTFL00PM.html>

[社会的孤立・孤独・ひきこもり]

- ▼2025/12/22 第10回 孤独死現状レポート 2025年12月 日本少額短期保険協会 孤独死対策委員会 https://www.shougakutanki.jp/general/info/kodokushi/news/kodokusReport_10th.pdf
- ▼2025/12/11 不登校はなぜ増え続けるのか？不登校35万人時代が問いかける存在意義…学校は通うものではなく“学びの拠点”へ Wedge ONLINE <https://tinyurl.com/2cnlv9md>

[社会システム]

- ▼2025/12/22 地域に根差すプロジェクトマネジメント－岩手地域での新産業創出事業の分析－ 科学技術・学術政策研究所（NISTEP） <https://tinyurl.com/2yw9u2dc>

※特定テーマ・分野に係る情報のキュレーションの要望があればご連絡ください。

5. 読者の声

[読者の声] 第二の人生 生涯現役で行く 9 (作詞・作曲家 高橋育郎)

「心のふるさとを歌う会」を大手新聞に

「歌う会」の会員が 40 人になった平成 7 年 4 月に、東瀧代表が大手新聞社に取材を依頼してくれて、LVC にて記者会見をした。すると新聞のコラム欄に出て、そのとき代表は 100 人の申し込みがあるだろうと予言した。すると予言は見事に的中し、私が夜帰宅すると電話が鳴り、あとあと鳴りやまなかった。

更にこの状況をみた他の新聞社が取材にみえて記事にしてくれた。そこで 40 人ほどの申し込みがあった。

LVC では、「生涯現役の会」を発足させた清瀬市、日野市、鎌倉市など 6 か所ほどの主宰者に混じって私も紹介した。すると 6 人ほどが入会した。ここに大学教授や商社の役員、新入社員研修請負の方々がおられた。そして、その大学教授によって、私の会にピアノ伴奏者がきまつた。その辺の経緯であるが、教授は自由が丘で自らセミナーを主宰していて、私に歌の指導に来ないかと声をかけた。そして「うちにはピアノ伴奏者がいますよ」といった。私は了承すると、ピアノ伴奏者が、私のところに電話をしてきた。ご親切にも「わたしが駅の改札口でお待ちしております」とのこと。さて、当日出かけてみると、その方は待っていて、会場まで案内してくださった。予定のプログラムが、たのしく恙なくおわると「帰りもお見送りしましょう」といって、自由が丘駅まで送ってくだされた。そのとき「内の主人も国鉄ですよ。施設畠ですが」といい、それ以上は言わず、私も聞かなかつた。それから私は「うちの会には伴奏の方がいないのですよ」といった。すると「では、わたしが伴奏しましょう」といってくれて、次回の日取りをいうと早速来てくださった。平成 7 年 5 月である。しかも謝礼はいらないとおっしゃった。野沢慈子と名乗り「家でピアノ教室をやっていて、出身は北海道大学教育学部」とおっしゃった。

新メンバーの方々は、口コミで会員を増やしてくれて、会員は、250 人ほどに達した。一度では教室に入りきれず、二組に分けた。前のグループを「すずらん」。後のグループを「りんどう」とした。そして「りんどう」の伴奏は、習志野市「青春の会」の栗原氏の奥さん、栗原靖子さんにお願いした。結局、月に 2 度の開催となった。

ここで私は、会のテーマソングを作詞作曲し野沢さんが編曲し、会の初めに皆で歌った。その後エンディングテーマを 2 曲作り、野沢さんと栗原さんが分担して編曲してくださった。

平成 9 年 12 月に 5 周年記念「私たちの学芸会」を開催し、川田正子さんをお招きした。会員は口を揃えて「ほんとうですか」と、驚きの声が上がつた。このステージで川田さんと共に演じた。会員はこぞって川田さんを囲んで大騒ぎになった。

このステージで桃太郎歴史研究会からの依頼で作った「桃太郎さん音頭」に振り付けが付いて 10 人ほどが踊つた。会員の中に日本舞踊をやっておられる方がおられ、振り付けまでやってくださった。

その後「私たちの学芸会」は折をみて行い、2 年間の間に坂本紀夫（霧島昇の御曹司）。高岡良樹、白川雅樹ら各氏を招いた。

100回記念（平成13年4月）には歌のお姉さんこと田中久美子。神戸朋子、横山太郎（NHKアコーディオン奏者）を招き、更に5月には千葉市民会館にて横山太郎と共に演した。

さて、この年会場が大きくなつたことで、二つのグループは一本化した。そこで二人の伴奏者は、一ヶ月交代とした。

ところで、この年には高木東六先生と坂本紀夫（霧島昇のご子息）のお二人とご交誼が始まった。サンケイ・ソシアルクラブをやっていた高木先生は、お歳が98歳だったが、私を自宅近くに呼んで、お話をした。高木先生は、昭和38年のNHK「あなたのメロディー」で審査員長をされていた。高木先生は、会合に私を何度か呼んでくれた。そして100歳になられたとき盛大なお祝いパーティーを開き、たしか三笠宮ご夫妻を招いた。そして、ダンスパーティーをやった。私は、そこまでダンスが身についていないので見る側にいた。先生は私と写真を撮ろうと肩を並べると女性たちが、私も私もと周りを囲んだ。先生は100歳記念CDアルバムを出して、私に郵送してくださった。

「日本の歌100年」をもって、「生涯現役会」の各地を巡回

清瀬市の「生涯現役」は「社会参加を考える会」と改名した。そして私を講師に呼んだ。テーマは「日本の歌100年」。カメラマンが3人ほど私を囲んだ。これは「全国図書館映画」になった。

これをきっかけに各生涯現役の会から呼ばれ巡回した。私が副会長の習志野市でも行った。

ここでエピソードをひとつ。平成7年3月。長崎市が編纂した「長崎被爆50年史」に私の詩「長崎の鐘が鳴る」が掲載され。そして、その本と鐘のミニチュアを頂いた。いまも床の間に飾っている。
(続く)

6. 連携団体及びJapaからのご案内

▼ 連携団体の(一社)レジリエンス協会主催「レジリエンスサロン」のご案内

- 開催日時：2026年1月26日（月）19時開始～（20時30分終了）
- トピック：「能登半島地震の復旧・復興はなぜ遅れているのか？」

～AIとの対話による深層分析～

by 石井洋之(IST 経営コンサルティング) 発表(70分)+質疑(20分)

- 詳細及び参加申込：<https://resilience-japan.org/>にてご確認ください。

▼ Japa Newsletter掲載写真の募集

Japa Newsletterの冒頭に掲載する写真を読者の皆さまから募集しています。

掲載を希望する写真（著作権所有／フリー）がありましたら、画像fileをキャプション付きで事務局までお送りください。Japa Newsletter編集仕様に則り掲載いたします。ただし、掲載希望多数等、事務局の判断で掲載できない場合がございます。

▼ Japa日本専門家活動協会の会員募集

Japaは、会員（個人）と連携団体の方々の参加と協働により活動しています。

Japaは、隨時、会員〔正会員、一般会員〕を随时募集しています。

申込みをお待ちしています。

正会員：入会金1万円、年会費1万円 一般会員：年会費3千円

入会案内の詳細 <https://www.japa.fellowlink.jp/admission>

7. つぶやき（編集後記に代えて）

世の中の変化の早さが増している。そのような時代に、利益必達の既往のコーポレート型組織体では、旬なテーマに柔軟に対応出来る専門家チームを編成するのが難しい。ましてや、社会課題対応型は難しい。そこで必要なのが個人としての専門家群のネットワーク型の事業体・Project チームではある。例えば、映画を撮るときに結成される「〇〇組」のようなイメージである。要するに、制約の多い企業の集合体ではなく、個人をベースにした専門家群団である。一つの事業、一つの Project が始まると集まり、終わると解散する仕組みである。昨今は、企業も副業を認めているし、社会課題解決に意欲があり、所属組織を超えて他流試合を望む人も少なくない。かって、コーポレート型シンクタンクの業態興しを経験してきた者として、次は、デジタル社会対応のネットワーク型 Think & Do タンクの形だしにトライしてみたい・・・・。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

発行元：Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp